津田梅子の生き方（11） ～実り豊かな留学～

梅子に許された留学期間 2 年のうち、最後の半年は教育・教授法の研究に当てられていたので、梅子は州立オズウィゴー師範学校に学ぶことを決め、1891（明治 24)年 1 月、オンタリオ湖東南の湖畔にある小さな町、オズウィゴーで充実した時間を過ごしました。

梅子は自身の学校生活が恵まれたものであることを自覚すればするほど、この素晴らしい体験を日本の女性達にも分かちたいという想いを強くしていきました。さしあたりの仕事として、自分が帰国した後、代わりの留学生を送ることができるようにするための資金が集められないものかと考え始めます。そんな中、梅子はアメリカでお世話になっているモリス夫人等に相談する内に、次のような方法を思いつきます。それは、募金を 8,000 ドルほど集めて、奨学金制度を設立することでした。その基金の利子で、3～4 年目ごとに 1 人ずつ、日本からブリンマー大学に学生を送ることができると分かったのです。ほどなくしてモリス夫人の発起で、奨学金募集のための委員会がつくられると、「日本婦人米国奨学金」の名称で募金を開始しました。

また、時を同じくして、梅子自身もさらに研究生活を続けたいとの希望を持ったため、留学延期の願いを華族女学校宛に出していました。その結果、華族女学校は一時休職とし、別に「米国留学中女子教育の取調を命ず」という名義を得て 1 年間の留学延期が認められました。

梅子は 7 月にはオズウィゴーを去り、その夏は、最初の留学で家族同然だったランマン宅で過ごすことができました。そして、募金のため、日本女性について、特にその教育の必要性について、フィラデルフィアやボストンなどで講演をしてまわりました。講演の中で、もし、日本女性にアメリカで学び得る道が開かれるなら、彼女たちは外国人が日本人を教えるよりも、はるかに有能かつ適切な教師となって帰国し、後進の教育に尽くすことができること、そのためには日本女性がアメリカで 4 年間大学教育を受けることが必要であり、それを可能にする基金の設立のため 8,000 ドルが必要であることなどを訴えました。

梅子は留学期間の 3 年のうち、最後の 1 年間は奨学基金募集のためかなりの時間と労力を捧げましたが、幸い、募金も予定金額を達成し、1892（明治 25)年 6 月には、立派な成績でブリンマーでの学業を終えました。ブリンマーでの生活に、さらにオズウィゴーの勉学を合わせると、梅子の 3 年の留学期間は実り豊かなものでした。1892 年 6 月 28 日にローズ学長の名前で発行された梅子の証明書には、梅子が在学中の 2 年半の間に歴史・生物・英文学・化学・経済学・哲学の諸科目をおさめ、全てに優秀であり、勤勉な学生であったこと、特に生物・化学においては優れていたことが記されている上に、梅子の英語が読み・書きとも見事で、英語を教えるのには最適であること、梅子の人となりは誠に立派で、教授・学生の尊敬の的であったことなどが合わせて記述されています。

また、この 2 度目の留学で梅子が出会った人の中で、ブリンマー大学学部長の M.ケアリ・トマス先生も、帰国後の梅子に大きな影響を与えた重要な人物です。トマス先生は、アメリカで女性が男性と対等な高等教育の機会を得られるように生涯を費やして尽力した教育者です。女性も等しく学び、考えることで、文学や科学の重要な分野で男性と競合できることを主張し、信条としていました。ブリンマー大学の創設時に学部長として就任したトマス先生は、女性性を重視した創立時の学長の方針をくつがえし、「道徳修養から学術的厳格さを重視」した方向へ導き、先進的な教育理念に変化させることに尽力したのでした。トマス先生に指導を仰いだ梅子は、留学していた期間だけではなく、帰国した後もトマス先生から助言や支援を受けることになります。トマス先生との出会いは、梅子が長年にわたって温めてきた夢の実現に大きな力を与えたのです。

留学期間を終えて帰国の用意をしている梅子に、「アメリカに留まってさらに研究を続けてはどうか」というブリンマー大学からの申し出がありました。またとない機会に、梅子の心は動揺します。さらに高度な研究を行って科学界の発展に貢献することも、十分過ぎるほど魅力的だったからです。しかし梅子は、個人の研究意欲を満たすよりも、教育の遅れている日本女性のために尽くすことの方が大事だという自らの考えを改めて信じることに決めました。既に奨学基金もほぼ予定の額に満ちていたため、梅子は 1892（明治 25)年 8 月に帰国し、翌月から気持ちも新たに華族女学校へ出勤しました。

参考文献：高橋裕子『津田梅子―女子教育を拓く』　岩波ジュニア新書　2022 年　117～123 頁
山崎孝子『津田梅子』 吉川弘文館　日本歴史学会編集　1988 年　頁